

シンポジウム 1-2 (覆 髓)

助かる歯髄、助からない歯髄、強拡大視野下で診断する

泉 英之

西本歯科医院 (滋賀県)

歯髄保存の原則は、助かる歯髄を見極め、マイクロリーケージを防ぐことである。マイクロリーケージを防ぐためには、術者の技術が鍵を握っており、マイクロスコープの応用がその精度を高めてくれる。また、材料の違いはあまり大きくないとはいえ、MTAの登場はテクニックセンシティブティのハードルを下げた。このような背景により、歯髄保存はこれまでより、予知性の高い治療法として受け入れられるようになってきた。

その一方で、露髄した歯髄が保存できるかどうかを確実に見極める方法はコンセンサスを得られていないようである。出血の有無や程度、時間など、様々な意見があるが、現在のところどれもエビデンスレベルの高い根拠ではない。筆者の臨床でこれらを基準として歯髄保存を行った場合の成功率は90%以上であったが、歯髄壊死をゼロにすることはできなかった。しかし、数年前にマイクロスコープで歯髄を視診することにより、診断の精度を上げられることに気付いてから、100%に近い成功率となった。おそらく、保存できていなかった症例は、最初から保存不可能であり、歯髄壊死が生じていたと考えられる。

今回は、限られた発表時間であるが、可能な限り、筆者がマイクロスコープを用いた強拡大視野下で、露髄した歯髄の何を見て、どう判断しているかを紹介し、ディスカッションしたいと思う。この内容も、症例報告に基づくものであり、エビデンスレベルとしては低いですが、皆様の歯髄保存の成功率を上げる一助となれば幸いである。

2000年 日本大学松戸歯学部歯科補綴学第Ⅲ講座

2004年 西本歯科医院

著書

コンポジットレジンと審美修復 (共著) (クインテッセンス出版)

抜髄 Initial treatment (共著) (ヒョーロン)

歯髄保存に関する書籍を2018年秋出版予定 (クインテッセンス出版)